



## Donor conception in the UK

### 英国の配偶子提供

#### Interviewee

Dr. Leah Gilman

#### Q. 自己紹介をお願いします。

現在、マンチェスター大学法学部に勤務している。社会学のバックグラウンドを持ち、ドナーによる懐胎、特にイギリスにおける精子と卵子のドナーに焦点を当てた研究をしている。これまでのいろいろな研究を結びつけている関心は、ドナーによる懐胎に関わる人々が、そのプロセスに関わる関係や役割をどのように意味づけるかという点に、焦点を当てているということ。当事者たちの経験や、彼らが置かれている制度や法律の文脈によって、彼らの考えがどのように形成されるかを探ろうとしている。研究の多くは、匿名性からオープンへの移行や、英国におけるアイデンティティの公開システムについて考察している。

さらに、ドナーの人間関係（家族のつながりやそれに関連するアイデンティティ）がどのようにドナーによる懐胎を形作っているかに関心を持っている。例えば、ドナーの両親は、提供することがどのような意味を持つかを考える。その考えがドナーの意思決定を形作っているかもしれない、など。

最新の研究は、商業的な遺伝子検査に関するもので、これはドナーによる懐胎から生まれた人々がつながりを作る方法を変えた。この技術は比較的新しいものだが、調査の過程で、過去に行われたド

ナーからの懐胎について、再び検証することになった。なぜなら、この技術によって、人々は、自分がドナーから生まれたことを発見し、新たなつながりを作ることが可能になったから。

#### Q. インタビューをして、印象的だった人物や発言などについて、教えていただけますか。

特に印象に残っているのは次の2つの話だ。これらは貴重な洞察をもたらし、ドナーからの懐胎に関する自分の考え方に影響を与えた。

ひとつは、博士課程在学中に行った、ある卵子ドナーへのインタビュー。この女性は英国で卵子提供を行ったが、彼女自身は西アフリカの国で育った。彼女は北欧出身の人と結婚し、その後イギリスに移住した。彼女自身が妊娠しようと格闘しているあいだ、妹にも卵子を提供していた。妹が卵子を必要としていたので、自分たちの妊娠は保留にして妹を援助した（夫はあまり乗り気ではなかった）。

クリニックのカウンセリングの過程で、カウンセラーは、妹に対して義務感を感じていて、それがプレッシャーになっているのではないかと彼女に問いかけ続けた。これら一連の質問は彼女にとって意味がなかった。なぜなら、彼女は、妹を助けるのは当然だという気持ちを持っていたから。なぜ、それが悪いこととされるのか、彼女にはわからなかった。このことは、英国で言われている利他主義について、異なる視点を提供してくれた。

二つめは、法律が改正され、ドナーが匿名でなくなった後、ドナーから生まれた人やその家族がドナーとコンタクトを取るかどうかを選択できるようになったこと。そして、ドナーは、ドナーから生まれた人が希望し、コンタクトしてくる



のを黙って待つべきだという考えが強くなってきたこと。

ある卵子ドナーは、自分の不妊治療の支払いのために、卵子の一部を凍結し、提供した。彼女は最終的にシングルマザー(solo mom)になることを決意し、妊娠出産したが、それと同じ周期に、提供された卵子から別の女性が娘を産んだ。

自分自身が母親になったことで、ドナーから生まれた人が自分に会いたいと思った時にだけ「会える」ので構わないという考えが変わりつつあった。自分の娘がいつか異母兄妹に会いたがるかもしれないと思うと、葛藤があった。最初は簡単そうに見えた考えも、彼女自身がシングルマザー(solo mom)であり、精子ドナーを利用したことで、より複雑なものとなった。そのため、彼女の子どもは、精子ドナー側の異母兄妹とつながる法的権利を持つが、母親が提供した卵子で妊娠した異母兄妹とはつながる権利がない。

**Q. 精子・卵子提供、代理出産などによって、伝統的な核家族とは異なる形の親密圏が作られようとしています。人々は、新しい関係性を恐れていますか？ 楽しんでいますか？ それとも、苦悩している人もいますか？ このことについて、具体的な事例があれば教えてください。**

この考えに対するさまざまな反応を観察してきた。このような関係を本当に喜ぶ人もいる。それは、異性愛モデルを超えた家族を可能にするからで、そもそもドナーになりたいと思った理由の一部であるかもしれない。

レズビアンのカップルに精子を提供したある男性は、自分の役割を既存の親族関係になぞらえて、「あなたはおじさんのような存在」と言われるのが嫌だった。彼は、もっと違う関係を築きたかったから。

一部のドナーにとっては、提供は、他の人が「普通の」家族を実現するのを助ける方法であり、彼らをノーマライズすることが重要だ。例えば、邪魔をしたり、介入したりしたくないという思いがある。そして「親」「母」「父」という言葉を使わないなど、ドナーと依頼親の境界線が非常に重要であると思われがちである。ドナーは実際には親ではない、という考え方が強い。

「母親」や「父親」といった言葉を使うことに非常に慎重な人でも、子ども同士のつながりを褒め称えることは問題ない場合が多いようだ。「私たちの子どもは、いどこ同士みたいなものね」というようなことを言うかもしれないが、他の人にとっては、これは行き過ぎかもしれない。ある卵子ドナーは、自分の子どもたちが半きょうだいとのつながりをこのように話す、とても落ち着かない気持ちになると言っていた。ドナーの子どもたちはドナーきょうだいを探す権利がないので、子供たちが憧れや喪失感を感じるのではないかと心配したようだ。

**Q. 精子・卵子提供、代理出産を利用した場合、家族の境界はどのように引かれていますか。このことについて、具体的な事例があれば教えてください。**

一般に、ドナーは両親の希望に応える傾向がある。親への調査を十分に行っていないので、自信を持って話せないが。

例えば、代理出産で妊娠したゲイカップルに提供したある卵子ドナーは、ジェンダーのダイナミックを強く意識していた。彼女は、子供への贈り物にとっても気を遣っていた。女性のロールモデルのように振る舞おうとしていると思われるのを恐れて、フェミニスト・アイコンの本を買ったりはしなかった。彼女は、ゲイカップルの気持ちに敏感だった。



**Q. ドナーになったことを、自分の配偶者や子どもに知らせることはどの程度、どのように行われていますか？ これはうまくいっていますか？ 具体的な事例などがあれば教えてください。**

ジェンダーによる差が大きいことがわかった。卵子ドナーは、両親、パートナー、子供などに、そのことをオープンにする傾向がずっと強かった。精子提供よりも、一般的に祝福され、問題が少ないと認識されていた。卵子提供は医学的な侵襲が大きく、秘密にするのは難しい。

それに対して精子提供は、現在イギリスでは報酬が最低限であるとはいえ、ちょっと「いかがわしい」イメージがある。なんとなくネガティブというか、気まずいという認識がある。積極的にチャレンジしようとする男性もいるが、周囲の反応がネガティブな場合もある。例えば、あるドナーは「職場でそのことを話したら、同僚を不快な気持ちにさせたと後で叱られた」と話してくれた。

自分が話した精子ドナーの多くは、両親に話しておらず、1人か2人はパートナーに明かしておらず、1人は自分の子供に話していなかった。精子提供はスティグマ（汚名）であり、ドナーきょうだいがたくさん生まれているのではないかと不安もある。

また、新たに子供ができたり、ドナーが亡くなった場合、提供から生まれた子供に連絡する手段がないため、そのような事態になることを懸念する声もある。成人してだいぶ経ってから提供をする人は、年老いた親が子孫に会う可能性がないため、伝える価値がないと考えるかもしれない。

**Q. 昨今、テリングすべき、という考え方が強いですが、その advantage と disadvantage について教えてください。**

テリングのデメリットとして、子どもがまだ幼いときにテリングをすれば、子どもが周りのみんなに伝えてしまい、親が気まずい思いをすることがある。まるで、その子の生殖に対する理解がませているかのように、他の子どもたちに伝わってしまう。保守的な文化圏の親にとって、このような事態にうまく対処するのは難しい。

DNA 検査ができるようになったからといって、人々の行動がすぐ変わるわけではない。DNA 検査が広く行われるようになる前から、子供に伝えるべきという強い考え方があった。英国では、DNA 検査が主流になる前に、すでにアイデンティティの公開制度が実施されていた。強く提唱されているモデルだが、義務ではないので、今後どうなるかは興味深い。

現在では、カウンセリングの際に DNA 検査の話が出るので、それで親の考えがシフトするかどうかは時間が経てばわかる。後戻りができないので、親が子どもに伝えるのを先延ばしにしていると、後で「いいタイミング」を見つけるのが難しくなる。

自分が話したあるドナーからの出生者の男性は、好奇心で DNA 検査を贈られ、それを暖炉の上に何カ月も放置していたそうだ。両親はそれを見ていたにもかかわらず、それでも両親は彼がドナーから生まれたことを告げなかった。彼は検査をして初めてそのことを知った。

**Q. イギリスの文化では、利他性の規範は強いですが、キリスト教の影響はありますか？**

身体（の一部）を提供することは、自発的かつ利他的であるべきという考えは、医学界や言論界で広く受け入れられているが、それが何を意味するかは文脈に依存する。



利他的な提供という医療モデルは、商業モデルとは真逆。「贈り物(gift)」のイメージは非常に重要。医学界では、贈与は完全に無報酬で、完全に無私のものであるべきだと考えられており、これは、市場モデルとは全く逆の考え方。それは、当事者が考える「贈り物」とは何かということと必ずしも同じではない。

人によっては、ギフトは関係性の取り決めや個人的なつながりよりも重要であると考えられる。すべての関係者が報われるようなつながりの感覚がある。これは、前の質問で西アフリカ生まれの女性が描いていた「ギフト」のモデルだが、カウンセラーの考えとは相反するものだった。

キリスト教の影響についてはよくわからない。自分がインタビューした中で、特に宗教に言及した人はいなかったが、文化的な背景から影響を及ぼす要因である可能性は高い。自己犠牲は、英国の文脈では利他主義の考えと密接に結びついている。例えば、自分が話を聞いた精子ドナーは、旅費を負担してもらおうと、贈り物であるという感覚が失われるから嫌だと言っていた。

**Q. イギリスでは、代理出産についても利他的であるべきだとされています。どのような背景がありますか。**

利他主義がなぜイギリスで重要視されているかという点と、搾取を避けるためだと理解している。また、子供が「冷たい」商取引から生まれたと知ったら、感情的な影響を受ける恐れがある。遺伝子に与える影響の部分はそれほど重要ではないだろうが、お金によって受胎のストーリーが「汚染」される可能性がある。お金が絡むと、それがポジティブなものから問題のあるものになってしまうという文化的認識がある。

**Q. 反対に、インドや新興国では、女性が卵子ドナーや代理母などになる動機は金銭であると指摘されています。どのようなポリティクスが働いていますか？**

これは自分の専門分野ではない。

しかし、それがグローバルなシステムとしてどのように機能しているのかを考えるのは興味深い。国際市場があることで、英国における利他的モデルはどの程度機能しているのだろうか。国際市場は、利他的モデルでは需要を満たすことができないので、プレッシャーがかかる。英国ではロビー活動も少なく、ブラックマーケットからの圧力も少ないと思われる。なぜなら、経済的に余裕のある人々が海外へ渡航するという出口があるから。

**Q. イギリス以外の地域や文化圏で、reproductive donation について、どのような考え方や特徴が見られますか？**

自分インタビューしたのは、英国外では、オランダでの提供経験者1名だけ。オランダは英国と状況が似ている。

マンチェスター大学の博士課程の学生の一人は、現在イランでの卵子提供について研究している。ローカルな文化やイスラムの文脈が、神との交渉として過去の罪を償うという考え方に織り込まれていく様子は、読んでいて興味深い。経済的なメリットと合わせて、卵子提供は人生における善行を積むための手段であると捉えることもできる。

**Q. 近年、ドナーのアイデンティティを公開する方向性が顕著になっています。そのことは、ドナーの動機の語りに影響を与えていますか？**

親が子どもに話すことが奨励されるだけでなく、法的な要件として開示する方



向へと確実に向かっている。これは、提供は利他的な理由であるべきだという考え方の変化と重なる。将来的にコンタクトが来るかもしれないし、20ポンドの補償金目当てで提供をしたというのは、気まずい話だ。昔は、提供をして、お金を受け取って、家に帰って忘れなさいと言われたものだ。今は、提供をする側の期待値が変わってきているので、提供を名乗り出る人のタイプも変わってきている。今は、家庭を持った年配の方が多く、若い学生は少ない。

卵子提供の場合は、利他的な動機と経済的な動機が混在していても、もう少し許容される。

### Q. 生まれてくる子どもにとって、ドナーがなぜ提供したか？という動機を知ることが、重要でしょうか？

子供たちは通常、提供の背景にあるストーリーを知りたいがる。確かに身体的特徴などは気になるが、提供の動機は、ドナーとコンタクトを取りたいかどうかに影響する。もしドナーお金のためだけに提供したのなら、ドナーからの出生者は、メッセージを送ったらブロックされるかもしれないと思うだろう。もし、誰かが家族を持つのを助けるために提供したのであれば、ドナーは将来自分に会うことに前向きであると、子供はより自信を持つだろう。

両親の場合はいろいろ。自分が話したドナーの中には、クリニック以外の場所で提供をした人もいる（例：クリニックを回避して、ソーシャルメディアを通じて提供する）。このような場合、動機は非常に重要だと考えられているが、必ずしもクリニックでの提供と同じように考えられているわけではない。ドナーの動機が一貫していることを知ることがより重要だろう。

例えば、ある精子ドナーは、妻と一緒に不妊治療をしている最中に、不幸にも妻が亡くなってしまった。それがきっかけで、彼は精子ドナーになった。彼にはすでに成人した子供がいたが、「一つの章を終える」ようなものだと言った。提供から生まれた子どもたちのことを、亡き妻の子どもたちのように、自分が生み出すべき命であるかのように思っていた。この話は、彼にとってとても重要なことで、その動機は珍しいものだったが、レシピエントはそれを理解し、彼が子供たちの父親になることを望んでいないことを知り、納得した。しかし、明確な理由がないまま提供するドナーもいて、依頼親は、ドナーが提供によって何を望んでいるのか分からないままになってしまうことがある。

### Q. 現在取り組んでいることは何ですか？

現在、消費者向けのDNA検査について研究しており、こうしたサイトを利用している親や、ドナーからの出生者の両方から話を聞いている。

それから、精子提供のための非公式なオンライン・ネットワークに関する研究を行うための資金を確保しようとしている。フェイスブックやその他のウェブサイトの研究して、それを使用している人たちが、自身がやっていることからどのような意味を取り出しているかを考察する。例えば、生殖は、デジタル技術に媒介された世界によってどのように形成され、変化しているのか、ということ。

(2022年8月)



**Dr. Leah Gilman, UK** [Link](#)

マンチェスター大学法学部の研究員として勤務している。

エジンバラ大学で2006年社会学、2011年に科学技術研究の修士号を取得。2007年には初等教育学 PGDE も取得している。

研究分野は幅広く、社会的、文化的、法的視点から生殖、人間関係、子ども、医学にまで及んでいる。現在は、社会学のバックグラウンドを持ち、ドナーによる懐胎、特にイギリスにおける精子と卵子のドナーに焦点を当てた研究をしている。

論文:

Gilman L. Toxic money or paid altruism: the meaning of payments for identity-release gamete donors. *Sociol Health Illn.* 2018 May;40(4):702-717.

Gilman, L. & Nordqvist, P. The Case for Reframing Known Donation. *Human Fertility* 2022 (in press).

Gilman, L. Beyond genetic connections: donors' feelings of affinity with their recipients. *Donor Conception Network Journal.* 2020.